経済コラム

67

AI時代に私たちはどう生きるか

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト　土田　浩

昨年、ChatGPTが大旋風を巻き起こした。文章で質問や依頼をすると、驚くほど自然な言葉づかいで瞬時に丁寧な答えが返ってくる、対話型のAIだ。

新しいもの好きの人はこぞって、試しに使ってみては、その驚きを口々に語ったものだ。ただ、私自身もそうなのだが、飛びついてはみたものの、遊び感覚でしか利用していないという人が多いのではないだろうか。自分の仕事に実装するイメージは、まだ持てていないということである。

そうした中で、一部の企業では、ChatGPTを含む生成AIの本格的な有効活用を模索する動きが進んでいる。生成AIは、人間のようにクリエイティブな成果物を生み出す点が特徴であり、文章、画像・動画、楽曲、プログラムコードなど多様な形態でのアウトプットが可能である。

企業が導入を検討するに当たっては、まず、生成AIの得手不得手を把握する必要がある。生成AIは、既に存在する膨大な情報を瞬時に収集・分析するので、調査・分析や量産化・効率化が得意だ。一方で、人を感動させるようなストーリーを生み出すなどの創作的なアウトプットは現段階では苦手なようだ。

ある企業では、画像データのモザイクがけをAIで自動化することで、単純作業の9割削減に成功したという。また、クレーマー対応にAIを使うという発想もある。もともとストレスのかかる仕事なだけに、これをAIに代替させることができれば、従業員もストレスから解放される。

AIの進歩は目覚ましい。厳しい企業間競争の中で、先行きAIに背を向けたままでは大きなハンディを背負うことになる。それでは、AIが普及した後の人間の仕事とは、どういうものになるのだろうか？

最も華々しい活躍が期待されるのは、アイデアを生み出す仕事である。アイデアさえあれば、生成AIがそれを自動的に文章や画像・動画にしてくれる。しかし、これはおそらく少数の人に限られるだろう。残りの大多数の人たちは、AIでは対応不能な例外的な事務処理か、接客業や肉体労働のような現場の仕事になる。

そういう社会の中で、人々は仕事に対してどのようにやりがいを持って働けるのか、企業は従業員に対してどのようなやりがいを持たせられるのか、悩ましい問題になるだろう。

AI普及後の世界では、画期的な利便性向上が図られる一方で、警戒すべき事象も想定されている。その一つは、すでに現実のものとなりつつあるが、フェイクニュースである。もっともらしい嘘をいちいち検証するには多大なコストがかかる。

また、論文などにおけるAI濫用も問題化している。AIは本来人間が補助的に使うべきものだが、AIに全面依存してしまえば、サボり癖という人間の性が横行してしまう。さらには、データの歪みの問題。偏ったデータや間違った情報をAIが学習することで、差別や格差が固定化されてしまう危険性も指摘されている。AIのダークサイドを考えることは末恐ろしい。

とはいえ、AIの発展を止めることは不可能である。その中で、いかに人間とAIとの共存のあり方を探るか。人間として、日々納得感のある仕事をし、満足感の得られる生活をしていくか。

ますます人間の人間たる由縁――良識、節度、愛情、信頼、思いやり、感動、情熱、冒険、リーダーシップ、多様性などなど――が求められる時代になると言えるだろう。